

健康福祉マネジメント学科卒業生の
キャリア形成に関する研究
—学科卒業生に対するインタビュー調査の実施から(その1)—

Awareness of Career Formation of Graduates of
the Department of Health and Welfare
—Interview for the Graduate (Part 1)—

影山優子
Yuko KAGEYAMA

サービス経営学部研究紀要 第31号

2017年(平成29年)12月20日抜刷

西武文理大学

健康福祉マネジメント学科卒業生の キャリア形成に関する研究 —学科卒業生に対するインタビュー調査の実施から(その1)—

Awareness of Career Formation of Graduates of the Department of Health and Welfare —Interview for the Graduate (Part 1)—

影山優子
Yuko KAGEYAMA

要旨

本研究は、健康福祉マネジメント学科卒業生9名を対象に個別インタビュー調査を行うことから、学科設置後10年が経過した学科の課題や今後の方向性に関する知見を得ることを目的とした。

本稿(その1)は志望校の選択から就職先の決定に至るまでの前半部分の報告である。多様な動機で学科に所属した学生が、専門課程での学びや経験を踏まえて職業選択を行っていくまでの思考過程が明らかになった。

Abstract

The purpose of this research is to obtain knowledge about issues in the Department of Health and Welfare Management as well as the future direction of the department, which was established 10 years ago, through conducting individual interview surveys of nine graduates of the department.

This paper (Part 1) is a report on the first half of findings about school choices and employment decisions. Results show that students have various and diverse motives, and that the thought process for their job selection was based on learning and experience in specialized courses.

[キーワード]

健康福祉マネジメント学科、卒業生インタビュー、キャリア形成

Keywords : Department of Health and Welfare Management
graduate interview
career formation

1、研究の背景と目的

西武文理大学サービス経営学部は、2007年4月に健康福祉マネジメント学科を新設し、2016年度末までに213名の卒業生を輩出した。初期の卒業生が、初職で継続して勤務しキャリアを重ねていけば、中堅から管理的立場へのキャリアを迎えるところである。

本学科では人材養成の目的として、「医療・健康・福祉事業に従事するために必要な広範囲の専門的知識を有し、多面的で総合的な「マネジメント能力」を備え、人間の尊厳の実現のために貢献する「ホスピタリティ精神」を兼ね備えた「豊かな人間性を持つ、実践的で柔軟かつ能動的な人材」の育成」を掲げている。実際、卒業生の多くが、ヘルスケアはじめサービス領域に就職しているが、そもそも、こうした領域でのキャリアのあり方についての知見が十分でなく、さらに大学教育がどのような影響を与えるかについても不明である。

そこで、本研究では学科の卒業生を対象に、学科卒業生のキャリア構築の実態、および大学教育、卒後教育の可能性について検討し、学科の課題や今後の方向性に関する知見を広く得ることを目的とした。

2、研究全体のデザイン

本研究では二つの調査を実施した。ひとつは、健康福祉マネジメント学科卒業生（2010年度から2015年度卒業）全員を対象としたアンケート調査である。調査の実施に際してはインターネット・リサーチ会社のサービスを利用した。実施期間は2016年11月1日から30日の30日間であった。この調査では①現在の仕事について、②転職や離職等に関する状況、③学生時代の学びや経験に関する振り返り、④今後のキャリア展望、などについての現状と意識を量的に把握し

た。

二つ目は、インターネット調査において自ら協力の意思を示した者及び学科教員が推薦する者計9名の卒業生に対して実施した個別のインタビュー調査である。

本報告は、このうち個別インタビュー調査結果の前半部分（その1）についての報告を行う。

3、インタビューの対象と方法

1) 対象

インターネット調査において、個別のインタビュー調査への協力の可否（可能な場合には氏名と連絡先を入力）を問う項目を設置したところ、6名から協力可能な回答を得た。このうち4名と連絡がついたため協力を依頼した。このほか、学科教員ゼミの卒業生やその友人のなかから、卒業年度や性別、現在のまでのキャリアや職業等に多様性を持たせた5名を推薦してもらった。計9名に対するインタビューは2017年2月から3月にかけて行った。対象者の属性を表1に示す。

なお、サブコースに関しては旧カリキュラムの卒業生（2015卒以前）は適用されない。

2) 倫理的配慮

インタビュー対象者には、事前にメール等で調査の目的、方法、記録（録音）、手順、結果の使用法と使用目的が記された文書を送付し、了承を得た。また、インタビュー当日は同じ内容を再度口頭で説明し、了承したうえで同意書に記入を依頼した。

その後インタビューデータを文字データ化したものを調査対象者に送付し、内容について確認を得た。また、データの分析やその後の掲載にあたっては、対象者の個人情報の保護に十分留意し、個人名、所属機関等、個人が特定される情報についてはすべてA・Bなどの記号で表記した。そのほか、文脈から個人が特定される

表1 インタビュー対象者の属性

		性別	卒業年度	サブコース	社福士	インタビュー時の職業	転職	インタビュー時間
1	Aさん	男性	2011卒	—	○	市町村公務員	なし	84分
2	Bさん	男性	2011卒	—	○	自動車部品製造業 工員	2回	132分
3	Cさん	男性	2012卒	—	○	飲食店 店長	なし	70分
4	Dさん	女性	2013卒	—	◎	特別養護老人ホーム 介護職員	1回	125分
5	Eさん	女性	2014卒	—	◎	社会福祉法人総務課 事務職員	なし	112分
6	Fさん	女性	2015卒	—		フリーター	1回	144分
7	Gさん	女性	2015卒	—		病院事務 職員	なし	76分
8	Hさん	男性	2016卒	健康スポーツ		自動車販売店 営業	なし	68分
9	Iさん	男性	2016卒	健康スポーツ		特別養護老人ホーム 介護職員	なし	70分

表2 インタビューの項目

	インタビュー項目
質問1	四年制大学を進路に選んだ理由はどのようなものでしたか
質問2	西武文理大学に進学を決めたきっかけや理由はなんでしたか
質問3	大学入学直後の印象はどのようなものでしたか
質問4	健康福祉マネジメント学科コースを選んだ理由はどのようなものでしたか
質問5	ゼミを選ぶときはどのようなことを考えましたか
質問6	学科やコースで得た学びで印象に残っていることはどのようなものですか
質問7	就職活動についてどのように考えどう活動しましたか
質問8	卒業後から現在の仕事に至るまでのキャリアやそこでの経験はどのようなものでしたか
質問9	今後のご自身のキャリア展望についてはどのように考えていますか
質問10	学生生活全般をふりかえっていまどのようなことを感じていますか
質問11	西武文理大学に対する意見や要望、後輩へのメッセージなどがありますか
質問12	その他何か話したいことはありますか

危険のある場合にはその属性を削除した。

一対象者の言葉をそのまま抜き出した箇所については斜体で示した。

3) インタビュー項目

インタビュー項目を表2に示す。本報告では前編としてこのうち質問1から6までの報告を行う。

4) 分析手順

録音された音声データを文字化し、データ分析を行った。本報告においては、インタビュー結果の概要を報告するという目的から、質問項目ごとに対象者の逐語記録から重要と思われる箇所を抜き出した。なお、本文中でインタビュ

4、結果

1) 四年制大学を進路に選んだ理由

高校3年次の進路選択の際に、どのような意思決定を経て「四年制大学」への進学を決めたのかについて尋ねた。

9人中4人が自ら四年制大学以外の進路を考えていなかったのに対し、4人が進路決定時において程度の差はあるものの「親の意向」を汲んだ選択を行っていた。表3にインタビュー内

表3 四年制大学を選んだ理由

	四年制大学を選択した理由
Aさん	親と話し合い、大卒のほうが進路が広がるのでまずは四年制大学に行き学べることを学ぼうと思った。
Bさん	通っていた高校が進学が多い学年だったし、高校卒業してすぐに働くというよりかは勉強して進学して何か資格を取ってから就職したいと考えた。特に親が強く勧めたわけではなく、周りの友達もそうだったし当然のように四年制大学への進学を考えた。
Cさん	本当は介護の資格が取れる専門学校に行き、さっさと家を出たかったが父親が公務員になれ（父親自身が公務員）と猛反対した。高卒卒で公務員を受けてももう準備期間が短く受からないので、四年制大学に進学して公務員を目指す（という体で）大学に行くことになった。
Dさん	就職という選択肢はなかったのので、専門学校（ホテル、CAなど）も含めて探したが、親が最終学歴を気にして、四年制大学を勧めてきたので従った。
Eさん	ちゃんとやりたいことが決まっていなかったので専門学校に行くに困るだろうなと思ったのと、短大だとちょっと短いかと思って。大学でやりたいことを見つけようと思って四年制大学を選んだ。
Fさん	就職で困らないためには大学で経営学を学ぶのが良いと考えた。
Gさん	高2の夏休みに宿題で学校見学があり、その時に専門学校も見したが大学のほうが時間も余裕があるし有意義に使えるかなと思った。特に就職を急ぐ気持ちもなかったし、親も四年制大学に行ってほしいという気持ちがあった。
Hさん	4年間遊べると思ったので専門学校や就職は初めから考えていなかった。
Iさん	出身校が定員割れを起こし進学校と合併してしまったため、高卒就職者が少なく、結果的に大学に進むことになった。

容を要約した結果を示す（以下同じ）。

Cさんは、本人は手に職をつけて早く家を出たかったため、介護の専門学校に行きたいと考えていたが、「公務員家系なんです。最初から公務員、高校卒業後公務員っていうのが、そういう流れだったらいい」と語ったように、四年制大学というよりは「公務員になること」を進路選択のタイミングで特に父親から強く期待された。高校時代はサッカー部に所属し、「高校3年間勉強してない。サッカーやってれば赤点取ってようが、夏休み明けたら黒になる。0点だろうが。サッカー部辞めなければ卒業できる」ような生活を送ってきたCさんは、大学の仕組みや大学に行く意味がどのようなものかよくわからないまま「福祉マネジメント、福祉が付いてるから、福祉だと思った。何の資格が取れるのかよく分からなかった」という状態で本学を受験することになった。

Dさんも、最初は専門学校の資料請求をし

ていたが「親に大学に行けって言われて、専門だったら学費出さない」と言われ進路変更をしている。親の意図についてはよくわからないと言いながらも「まあ多分専門だと高卒と同じになっちゃうし、最終学歴が。多分そういうのとか、勉強したくないから専門、っていうのはダメということ」だったのではないかと自己分析している。

一方で、四年制大学への進学に迷いがなかった4人からは「大卒のほうが進路先が広がる」（Aさん）、「普通科だったし。高校卒業してすぐ働くっていうよりかは、勉強して進学して、勉強して何か、資格、取ってから、就職したいとは考えてて」（Bさん）、「結構遊びたいなと思って」（Hさん）といった動機が語られた。

2) 本学を志望した理由やきっかけ

本学を志望した理由やきっかけ、併せて受験した際の入試形態について尋ねた。志望動機は

表4 本学の志望理由

	入試形態	本学を志望した理由
Aさん	一般	もともと経済か福祉のある大学に行きたいと思っていた。(経済は「就職が広がる」という親の勧め、福祉は保育士に興味があったため) これらの条件に加えて学科が新設されるということだったので良いと思った。
Bさん	センター入試	自分の学力で入れるところで福祉学科がある大学を選んだ。いくつか受けた他大学は不合格だった。本学は一般入試の補欠で合格。
Cさん	指定校推薦	通っていた高校で自分が指定校がもらえる大学がここしかなかった。(本当はサッカー推薦で行きたい大学があったが成績が悪く推薦してもらえなかった)
Dさん	英語AO特待生	付属の大学に行く選択もあったが、内部推薦はセンター試験を受けなければならず面倒だと思った。ホテル、ブライダル、CA系で検索したら本学がヒットした。実家から出たいということもあり、親が安心できる治安と実家からの距離(親が来やすい)などの条件から本学がちょうどよかった。
Eさん	指定校推薦	高校では福祉コースにいたので、福祉も気になったが、それがすべてではなく途中で学科を選べるのが良かった。受験よりも推薦で行けるところでないと学力的に無理だと考え、指定校一覧から選んだ。自分の家が東京郊外だったため、そこから通えるという条件の大学はかなり限られた。
Fさん	AO入試	どの学部もピンとこなかったなかで、一番ピンと来たのが経営学部だった。仕事といえばサービス業と思い、就職しやすさを考えて「経営学」でいいかなと思った。絶対入れるだろうし就職率もいいしと考えた。面接のときはなんかそれっぽいことを言っときゃいいと思い「ブライダル志望です」と言った。
Gさん	指定校推薦	指定校で行ける大学のリストにあり「健康福祉マネジメント学科」という名称が気になったことと、大学にしては少人数制である環境が気に入った。
Hさん	指定校推薦	指定校で行ける大学のうちから、車で通える範囲という条件で探した。ソニックシティで行っていた合同説明会のブースで文理の Mascot キャラクターのクマをもらい、クマ好きな自分としてはいいなと思った。
Iさん	一般入試	高校を卒業したら一人暮らしがしたかった。東京じゃなくても関東圏がいいなと思った。親戚がいた埼玉がいいかと思い、その近くで偏差値も妥当な本学を選択した。もともと野球をやってきたので、福祉マネジメント学科に「ライオンズのやつやってます的なやつ」があったのでそれもいいなと思った理由の一つだった。

表5 一番の理由

	入試形態	本学を志望した一番の理由
Aさん	一般	新学科だった
Bさん	センター入試	自分の学力に見合っていた+福祉学科がある
Cさん	指定校推薦	指定校で行けるところがここしかなかった
Dさん	英語AO特待生	立地条件が自分と保護者にとって都合よかった。
Eさん	指定校推薦	学科を2年生になってから決めることができる
Fさん	AO入試	就職率が良い
Gさん	指定校推薦	オープンキャンパスの印象が良かった
Hさん	指定校推薦	勉強したくないから指定校で行ける大学だった
Iさん	指定校推薦	一人暮らしがしたくて物理的条件が良かった

入試の際に準備する形式的な内容のものではなく、実際(本音)はどのように考えていたのかを聞いた。表4に志望理由、表5に一番の志望理由をまとめた。

入試形態は9人中4人が指定校推薦、そのほかは一般入試2名、センター利用入試、英語AO特待生、AO入試各1名であった。

本学の志望理由としては、健康福祉領域に関心があった人が6名であった。その他は、「当時の学力で入れる（推薦をもらえる）大学がこ

しかなかった」「いくつか受けた他大学は不合格だった」といった理由のほか、「途中で学科を選べる」「就職率が良い」「少人数制」「自宅から近い」「立地条件が良い」「オープンキャンパスの印象が良かった」などの理由であり、表6に示すようにその理由は複合的であった。

表6 志望理由一覧

	健康福祉領域に関心があった	サービス経営領域に関心があった	新学科だった	学力に見合っていた	家から通いやすかった	一人暮らしをするのに適度な立地だった	周囲の環境が良かった	他大学の受験に落ちた	就職率が良い	OCの印象が良かった	学科選択が2年次から良い
Aさん	○	○	◎					○			
Bさん	◎		○	○		○	○	○			
Cさん	○			◎							
Dさん		○		○		◎					
Eさん	○	○		○	○		○				◎
Fさん		○		○					◎		
Gさん	○						○			◎	
Hさん				○	○						
Iさん	○			○		◎	○				

学科一期生であるAさんは、親が経済系を勧め、本人は福祉（保育）を勉強したいと考え「どっちか」を検討していたが、「ここが新しく学科新設するっていうのをパンフレットとかで見たのでこっちのほうがいいかなと思って」進学を決めた。大学における福祉分野の学びについてのイメージは「養護施設とか児童相談所とかいろいろな施設を周ったりとかできるのかなと思って、最初。学べること多いのかなって思って。今、そういうのも、自分のときもそういう福祉とかニュースで出てたんで」というものであり、また学科で取得できるとパンフレットに謳われていた「社会福祉士」資格については「社会福祉士は正直な話そんな調べてなかったんで、そこまでは」とのことで、介護福祉士と混同して認識していたらしいことが語られた。

同じく一期生のBさんは、両親が聴覚障害者であったため「ちっちゃいころから手話サークルとか連れてってもらって。小旅行みたいな

の、結構行ったりしてて。なんで、福祉関係のことについて、なんて言ったらいいんだか難しいんですけど、そういうのが普通だった」という理由から、福祉系の進路を選択することはある意味あたりまえであったという。そのうえで「自分の学力で入れて福祉学科がある」大学をいくつか一般受験し、最終的にセンター入試の補欠合格で本学に入学した。福祉学科があったという理由のほかには、家を出たかったという理由もあったとのことで、「川越とか狭山とかでしょ。地元から遠くもなく。都会過ぎず。いい立地でしょ。いい環境でしょ、あそこ。まったりしてて」という関東近県出身のBさんにとっての立地条件の良さも大きかったという。

一方、CさんEさんGさんHさんの4人は指定校入試を利用している。Cさんは自分の学力で指定校が取れる大学が本学を含めて2校しかなく、そのうち福祉があったという理由で本学を選んでいる。ただ、Cさんも学校を決める

際に「福祉を学ぶ」という意味や、取得できる資格についてはほとんど理解しておらず「福祉マネジメント、福祉が付いてるから、福祉だと思った。何の資格が取れるのかよく分からなかった」という認識のまま入学し、実際、入学後も3年生になるまで介護福祉士と社会福祉士の資格を混同していたとのことであった。

Eさんは公立高校の福祉コース出身であるが、「大学受験に備えた勉強をしてこなかった」ため、指定校入試で入学できることと、自宅から通えてかつ通勤ラッシュに当たらないという点を条件に大学選びを行った結果、その時点で候補となる大学はかなり絞られたという。そのうえで、高校の延長で福祉も学んでみたいと思ったが「最初から何とか学部、何とか経営学部の何とかコースとかがって、結構みんな決まってるじゃないですか。指定校だと、さらに決まっちゃってたりするんで。そこがもし自分が、例えば、全然関係ないブライダルだったりとか、違うところに行きたいなと思っても、変えられるな」という理由から、2年次まで学科コースが決定しない本学を選択した。

Gさんは候補にした大学にいくつか学校見学に行くなかで「オープンキャンパスでの印象が良かった」ことを一番の理由に挙げた。「雰囲気的にも、都会とはまた違った感じが魅力だったのかなと思って、落ち着いてる感じ、雰囲気

気が落ち着いている感じも、校風もよかった」「オープンキャンパスの先生の対応も、先輩とかも優しかったし」「大学入って、後にオープンキャンパスで話してくれた先輩が、うちのことを覚えてくれて嬉しかった」と振り返った。

またHさんは「面接とか、学校の勉強とか試験とか、したくなかった」という理由からまず指定校で受験できる大学を探し、次に「あとは車で通えるところがいいなと思って。電車、酔っちゃうんで」という理由から車通学できることを重視した。Hさんが大学を選ぶ際の条件はこの2つだけであり「大学で何をやりたいかというのは決めていなかった」という。

3) 入学後の印象と一年生の時の学生生活

入学し、大学生活が始まってすぐ(4月から6月くらい)の時期、大学あるいは学生生活についてどのような印象を持ったか振り返ってもらった。表7に示す。

9人中4人が「思っていたイメージとのずれはなかった」「いろんな世界が見れてよかった」「普通に楽しかった」「授業もゆるくてよかった」といった前向きな印象を持ったのに対して、「クラスで動くのが予想外だった、苦手でした」「周りの子が自分とは合わないと思った」といった、主として大学での人間関係に対するネガティブな印象も聞かれた。表7に示す。

表7 大学入学後の印象

	大学入学後の印象
Aさん	スーツ着て授業を受けるのは新鮮な感じだった。思っていたイメージとのずれはなかった。
Bさん	福祉だけでない勉強があり、いろんな世界が見えて良かった
Cさん	なんだかよくわからなかった((筆者注)介護福祉士になれると勘違いして入っているため)
Dさん	気楽だった。遊んで終わった。
Eさん	クラスで動くのが予想外だった、苦手でした。
Fさん	周りの子が自分とは合わないと思った。しょうもない会話しかしていない。
Gさん	普通に楽しかった
Hさん	車通勤できて駐車場も安くて良かった。授業もゆるくて良かった。
Iさん	苦ではなかった。普通。

Bさんは社会福祉の勉強がしたいという明確な目的をもって入学したが、一年次に必修であるサービス経営学部生としての勉強については「自分の中では、いろんな世界が見えて良かったな」と捉え、「資格を受験するのに必要な単位を取るのに、要は三年間で取れるは取れるってことじゃないですか。で、一年間、また別の勉強ができるのは、自分の中では良かった」と振り返っている。

同じく医療福祉系の学びができると考えて入学したGさんも「医療福祉関係の仕事っていうか、勉強したいっていうふうな気持ちできたけど、でも（それらの科目がないことについて）しょうがないよなと思って、ひとまず勉強するじゃないですか。最初はしょうがないなと思って勉強してたんですけど。でも、それを勉強するにあたって、逆に視野が広がったかなと思って。（普通だったら）勉強しないじゃないですか、経営とか。経営とか経済とか勉強していくと、この企業はこういうふうな戦略で行き着いたんだとか、そういうのを具体的に、純粋に楽しいと思いました」と語った。

一方、介護の技術などの勉強ができるとして入学したCさんは、入学後自分が期待していた勉強がなかなか始まらないことに対して「よくわからなかった一年」であったという。介護の資格は取れないことはもちろん、学科は二年生から分かれることなど、大学の仕組み自体を理解できておらず、周りの友達が退学していく中で「とにかく福祉が始まるまでは」という気持ちで一年間をやり過ごしたという。

Eさんはクラスごとに必修科目を受講する本学のスタイルについて「予想外」と感じ、自由だった高校時代よりも集団で動かなければならない環境に最初は戸惑ったという。また、大学を選ぶ際に「経営か福祉かを途中で選べる」ことが動機であったが、実際に授業を受ける中で比較的早い段階で「経営向いてない」と思ったというが、「向かないことが分かったこ

と」で納得した。

Fさんは授業の内容ではなく、学生の雰囲気「あまりにも周りの子が自分と合わない」と早々に感じたという。「人をばかにする感じが雰囲気として出てたりしてたのと、あとイキがっちゃって己を分かってない感じ。これ何言っても分からないなみたいな感じ。言葉が通じてるようで通じてないみたいな雰囲気」「しょうもない会話がいっぱい聞こえてきて。もう少し考えてから言葉を発すればいいのに」「授業云々ではなくそっち（雰囲気）でもう嫌だな」と感じ、その初期の印象が以降の、友人たちとはやや距離を置いた付き合い方をするようになった。また、Fさんは指定校入試の面接では「ブライダル志望」と言ったものの、「周りの友達が（ブライダルを）やりたいと言っているのを見て、あの子たちはやりたくないなと思って。そうしたらもういいかなみたいな感じ」になり、結局大学においてブライダル関係の授業は一つも履修しなかった。

4) 健康福祉マネジメント学科を選んだ理由

一年後期に行う学科選択において、どのような理由から健康福祉マネジメント学科を選んだのかを尋ねた。9人中6人が入学した時から健康福祉マネジメント学科に行こうと考えていて、その他の3名は「教員に勧められて」「先輩から単位がとりやすいと聞いて」「スポーツ指導者の資格が欲しかった」といった理由から学科を選択していた。表9に示す。

英語特待生入試で入学したDさんは入学当初「ホテルとかCAとか、英語が使えるような場所で就職が決まればいいやぐらいには思った」が、一年間の学生生活を送る中で「授業してるうちにホテルとCAへの憧れが時間がたつて薄れた」という気持ちの変化があったという。そのうえで、学科選択の時期を迎えた頃に「何かのきっかけで自分の周りで福祉が必要だと思ったことが多分あって、生きていく上で

表8 一年生の時の学生生活

一年生の時の学生生活	
Aさん	福祉の勉強がなかったが、2年生から学べるからこんなもなくなって思った
Bさん	いろんな世界が見えて良かった。1年間また別の勉強ができるのは自分の中でよかった。
Cさん	周りの友達が退学していくなかで、とりあえず福祉の勉強が始まるまでは、と思っていた。 (いつ始まるのかは理解できていなかった)
Dさん	授業をさぼりまくりぎりぎりの出席率でしのいでいた。クラス単位の授業が多い中で馬鹿なことを言うクラスメイトやうるさい留学生がいて迷惑だった。AO奨学生で入ったのでオーキャンスタッフを2回やったが、期待していた学生像と違っていたらしく2回で呼ばれなくなった。
Eさん	たぶん経営向いてないなって思った。なんでかははっきりわからないけど面白味を感じなかった。でもそのことを知れてよかった。
Fさん	プライダルがやりたいと言って入学したが、周りの友達と合わずプライダルは結局やらなかった
Gさん	最初は期待していた福祉の勉強がないので違うなと思いつつ、仕方なく勉強していたが、逆に視野が広がった。経営とか経済とかを勉強していくと、この企業はこういうふうの戦略で行きついたんだとか、そういうのが純粋に楽しかった
Hさん	フットサルに入って楽しかった、いろいろやったアルバイトも楽しかった。
Iさん	最初は授業をあまりとっていなかったので普通に大変じゃないなって思う感じで大学生生活送っていた。友達もまだいないしアルバイトも最初はしていなかったので特になんか暇だった。志望動機の際に挙げたライオンズの授業で、見学に行ったりアプリを作ったりした。

表9 健康福祉マネジメント学科を選択した理由

健康福祉マネジメント学科を選択した理由	
Aさん	とれる資格が3つあるなかで、社福を選んだ。それにより必然的に健康福祉マネジメント学科になった。
Bさん	福祉に行くつもりで来たので全く迷わなかった
Cさん	福祉をやろうと思って入ったから
Dさん	教員に社会福祉士を勧められて必然的にそうなった。親も資格をとれると安心すると思った。
Eさん	(1年生の最初で経営は向いていないとわかったので)福祉学科に行くつもりだった。1年生の時から診療情報管理士の科目を取っていたが、2年生になって社福コースにすることにしたら科目がかぶっていたので社福コースにした。
Fさん	先輩から単位が取りやすいと聞いた。福祉学科に行ったからと言って全員が福祉に就職するわけではないと思った。就職の時にどっちになっても役立つと思った。
Gさん	もともと健康福祉マネジメント学科にしようと思っていたのでそこに迷いはなかった
Hさん	スポーツ指導者の資格取得に有利なので
Iさん	入学した時から福祉学科に行こうと思っていたら迷わなかった

福祉が切り離して生活ができないと思ったことが多分あった」ことを思い出し、「たまたまうちの学校に社福の科があった」ことを知り、社会福祉士を目指すことに決めた。「たまたま」という発言からわかるように、本学に福祉を学

ぶことができる学科があることは受験の時には知らなかったという。

Fさんも入学時はプライダルを志望していたが、上記したような理由から早々に受講を取りやめていた。学科選択の時期に、「先輩が健康

福祉マネジメント学科のほうが単位が取りやすいんだよみたいなこと言っていたから」ということを聞いて気持ちが動き、「あ、じゃあそっちだなみたいな感じで。別に全部の勉強が福祉になるわけじゃないから、就職のときにサービスのほうってなっても、そんなね、みたいな。どっちもできそうだったから飽きないかなみたいな、そういう安易な気持ちもあったかな」という理由を語った。

指定校推薦入試と車通学できることが大学選びの条件であり、入学後はサークル活動やアルバイトを中心とした生活を送っていたHさんは、「大学入って特に遊んでばっかで、資格何も取らないと入った意味ないかな」「大学生の在学中に取れる資格取るところかな」という気持ちから「自分でも興味もてて取れそうなやつ」だった、スポーツ指導者の資格を目指すことにする。学科選択については「学科はそっ

ち系いくならスポーツの勉強もしといたほうがいいかなってことで、健康福祉のほうが。アルディージャのやつもあったし」「あとは先輩の話聞いて、そっちのコースのほうが結構体動かす系のとかあっていいよって言ってた」といった動機から選択している。

5) ゼミ選択の理由

学科選択と並行し、所属ゼミを選択する際にどのようなことを考えたか尋ねた。表10に示す。

なお、対象者9名のうち5名が社会福祉士コース（社会福祉士国家資格の受験資格を取得を目指すコース）に所属していたが、旧カリキュラム（2011年度入学以前）では教員の所属学科を問わずゼミ選択ができた。しかし、新カリキュラム（2012年度入学以降）では、社会福祉士コース生に限って健康福祉マネジメント学科所属の教員のゼミから選択する学内ルールが作られた。

表10 ゼミ選択の理由

	サブコース	ゼミ選択の理由
Aさん	—	ゼミにサークルの先輩がいたから
Bさん	—	仲が良かった友達と同じゼミにしようということと、あまり大人数でなく落ち着いた感じのゼミを探した結果たどり着いた。
Cさん	—	福祉に行くからには福祉の教員のゼミが良いと思い、たまたま1年次のFAが福祉系教員だったから。しかし、ゼミ自体よくわからず、決めないといけな時期が来て流れに沿って決めた。特に意味はない。
Dさん	—	社福コースと決めたら二人の教員のうちからしか選べず、楽しそうだなと思って消去法で決めた
Eさん	—	将来児童関係の仕事に就きたいと思っていたので、それを専門としている教員のゼミにした
Fさん	—	入試面接のときにK先生だったため、一通りゼミを回ってなんか媚びない感じが良かった。楽そうで変に気を使わなくてよいと思った
Gさん	—	当時歴史にはまって、ゼミで武士道のことをやっていると聞いたから
Hさん	健康スポーツ	「スポーツ指導者」の資格を取ることができるから
Iさん	健康スポーツ	学科は健康福祉と決めていたがゼミはどこでもいいと思っていた。友達とプライダルのゼミに行ったら全然興味がなくなることがわかり、たまたま空いていたゼミにほかのゼミに落ちた友達と一緒にいくという流れになった

教員の専門領域を意識したゼミ選びをしていたのは9名中2名であった。ほかの理由としては、先輩や友人がいることや、教員の人柄やゼ

ミの雰囲気などを手掛かりにゼミ選択を行っていた。

6) 学科やコースでの学びで印象に残っていること

社会福祉士コース生5名のうち4名が3年次に行った社会福祉士実習を印象に残っていることとして挙げていた。また、そのほかの4名のうち2名も診療情報管理士や介護職員初任者研修の資格取得のための学びの経験を挙げていた。表11に示す。

社会福祉士実習の経験を挙げた4名はいずれも、実習に出たことでわかった現実の厳しさや福祉的支援の難しさに直面したことを語っていた。

重度重複障害児童が通う施設で実習をしたBさんは、今でも実習の経験を「言葉にするのが難しい」と振り返りつつ、利用者本人と親、施設職員それぞれの意向が異なり、それらが「駆け引き」のように感じたことについて、「実際にはやっぱり、そういうのもあるんだなって。やっぱり学生だから、そういう。バイトとかもあんま、そこまでしてなかったから。実際社会ではこういうこともあることを知った」と語った。

障害を持つ人が通う就労支援B型事業所で実習をしたDさんは、「障害はそれこそ小っちゃい頃からダウン症の友達とかもいたし、なんか別に不思議じゃなかったから、一番なんかいいかなぐらいの」気持ちで「本当に軽いノリ」で選んだが、実際に仕事経験するなかで「学生が夢見ているような雰囲気じゃない」ことに気づいたという。福祉作業所といえども、受注品の確保や納期に間に合わせるための作業に実習生という立場ながら「組み込まれて」時間に追われる現実があり、質問をしても思っていた回答が得られないなか「最初の1週間とか10日ぐらいで、よし実習修了のサインをもらおうマシンと化そうって決めて、ひたすら箱(受注品)折って、勝手に日誌書いて、とりあえず無事に難なく修了させようと思ってた」と振り返っている。

Eさんは「高齢者施設だと仲良くなった人が亡くなっていくのは嫌だな」と思ったのと、もともと子ども好きだったことで、児童養護施設を実習先に希望した。しかし、実習初日に関わった児童とのやり取りを通して「私、多分ここ、耐えられないじゃないけど。何ていうんだろう。なんか駄目だと思っちゃった」と感じた。その背景として他者に感情移入しすぎてしまう性格であることや、自分自身の家族関係と重ね合わせて考えてしまったことなどがあり、自分はそうした現実に対してうまく流したり耐えていくことができないと実習初日で悟ったという。

高齢者デイサービスに行ったAさんは実習に行く前は、高齢者施設での仕事は車いすを押したりお話をしたり、といったものであろうという漠然としたイメージを持っていたが、実際には「勉強やら法律とかもある」ことを知り、「例えば自分で就職したらどうなのかな」と、実習経験がその先の就職に向けて現実的なことを考えるきっかけになったという。

一方、Fさんは3年生の時に介護職員初任者研修の資格を取ることになった。ゼミの教員から「受講生が少なそう(で担当教員が気の毒)だから」という理由で半ば強引に勧められたこともあり、自身の関心からのスタートではなかった。結果として、「担当の先生に一番迷惑かけた、ごめんなさい」と言うほど欠席も目立ったが、一年間かけて学んだ介護に関する講義と技術演習はFさんにとって結果的に「大学の授業で一番深い」ものであり、「いずれは親を介護することになる」つमりのFさんにとっての「リアル」な経験になったという。また、入学時から同級生達の雰囲気に居心地の悪さを感じていたFさんであったが、初任者研修の雰囲気は「人の居心地が良い」と感じたという。

診療情報管理士を目指していたGさんは3年生の時に資格取得要件である病院実習と、介

表11 学科やコースの学び

	学科やコースでの学びで印象に残っていること
Aさん	3年生の時に高齢者デイサービスに社会福祉士実習に行った。実習自体は楽しかったが、それを仕事にするのは大変なのかなと思った。高校時代に思っていた福祉を学ぶことのイメージは全然違った。おもしろそうだと漠然と思って社会福祉コースに入ったが、現場を見ると大変だしいろいろ勉強することも多いことを知った。
Bさん	福祉系の科目の中では福祉の歴史が特に苦手だった。あとは、対人が苦手だったので演習もダメだった。でも、それができるようになったらまた違う世界が見えてくるんじゃないかと思った。苦手な自分を克服したいという気持ちがあった。実習経験(重度の障害児童の通所)を通して、親や職員の意向の違いみたいなのが見えてきて、対立したりもしていて、実際社会ってこんなこともあるんだなと思った。それから大学3年の時、直接の原因は思い出せないけど、就職活動がうまくいかずに自暴自棄な時があって、課題を出さないで勝手に帰ったら先生に自転車まで入間川の橋まで追いかけられたこともあったのよく覚えている。
Cさん	福祉学科の履修の仕方を理解しておらず、学科専門科目だけを履修していれば卒業できると信じ込んでいたため、4年になってからとらなければならない科目がたくさんあった。3年の後期になってようやく履修を理解した。とにかく福祉の(指定)科目は絶対にとらなくちゃいけないと思っていた。いつも一緒にいた友達がまじめだったので自分は卒業できたと思う。その子のおかげで卒業ができた。
Dさん	勉強の内容自体は別に面白いと思わなかったが、演習系の授業は面白かった。実習では(障害者就労B)学生が夢見てるような雰囲気じゃないと感じた。支援や相談以前に、作業所で受けた受注品を納期までに仕上げなければならない、それができなければ利用者の工賃も増えない、利用者がこなればうちらのお給料も増えないっていうそのループみたいな中に組み込まされて、大変だーって思いながらひたすら箱を折っていた。現場のあの忙しさに実習生のエゴは許されないんだなと思った。
Eさん	社会福祉士コースは2年3年で忙しかった。1年生の時から科目があればもう少し楽なのにと考えた。家も遠かったが、途中でやめたらすごく悔しいと思ってがんばった。福祉の専門科目はざっくり分かった印象。実習(児童養護施設)は初日から逃げ出したくなるようなことがあり、これを仕事にするこの難しさを感じた。
Fさん	3年生の時に履修した初任者研修が大学の学びの中で一番深かった。ほかの授業は「だからなに?」っていうのが多かったけど、この授業は現場でやっている人がリアルタイムで教えてくれるからリアルだった。自分にも親がいるからいずれは介護をやらなければならないことがわかり、自分にとってもリアルだった。ほかの授業は居心地が悪かったけど、初任者の授業は意見とか言わなくちゃいけなかったの、そのスタイルが自分に合っていたんだと思う。
Gさん	診療情報管理士の受験資格の科目履修と、3年次に初任者研修を履修。診療情報管理士は春に実習に行った。純粋に楽しそうだなと思ったのと、大学生になって形になる資格を何か残しておきたかった。診療情報管理士は3年生2月で試験を受けたが勉強していなかったため不合格。翌年の再受験はもう考えず、もっとちょっとゆったりした大学生活を送ろうと決めた。初任者研修は先輩後輩の区別なく勉強できて楽しかった。
Hさん	スポーツ系の授業は結構楽しかったが、福祉系の授業は聞いてもよくわからないのが多かった。スポーツをやるうえでのメンタルや経営の仕方を勉強でき、部活にも生かすことができた。3年の後期と4年に関してはほぼ単位は取り終えていて、とらうと思えば他にも単位は取れたが。わざわざ学校行ってまで学ぶほどじゃないかなと思った。学費は払っていたが週1とか週2で。
Iさん	印象に残っている科目や授業は特になく、コース(健康スポーツ)に属しているという感じもなかった。でも、一年生の時よりは自分が好きな科目をやれたので、1年生の時よりも充実感があった。履修の時にサービス経営学科のほうが授業数が多かったような気がしたのでいいなと思ったりはした。

護職員初任者研修の資格取得をした。3年の冬に受験した診療情報管理士の試験は「勉強をしていなかったから」不合格となった。その後、再挑戦することもできたが、Gさんは「ゆったりしながら取れるっていう感じの資格じゃないなって思ったんですよ。マジでやりたいなって思うんだったら、専門学校とか、そういう専門的に先生がきちんと見てくれたりとか、受験と同じです、自分で何時間勉強してとか、そういうのを自分でやらないと無理だと思って」その後の受験への挑戦をそこであきらめた。

7) 就職活動について

3年後期から4年生春にかけて開始する就職活動について、どのように考えどう動いたか、その経験を尋ねた。実際の就職先とともに表12に示す。

大学入学時の希望と実際の就職先が一致していたのは9名中2名で（Bさん：福祉系、Fさん：サービス系）、それ以外は在学中に自分のやりたいことや仕事に対する考えが変化したり、もともと就職について考えを持っていなかった。

また、結果的に健康福祉マネジメント学科での学び（福祉・医療系）と関連した就職先を選んだのは9名中5名であった。

また、表13に就職先を選ぶ際、特に重視したことをまとめた。

Aさんは社会福祉士コースに所属し、社会福祉士の受験資格も得ているが、就職活動に際して「(福祉の)現場も大変だし、あと身体壊しやすいのかなと思ったんで、長くやるんだったら一般企業でやったほうがいいのかな」と思い、あえて福祉系は外した就職活動を行った。100社くらいエントリーし就職活動を行っている最中に父親から地元なんだから受けてみればと勧められ、「受けないよりは受けた方がいいんじゃないかってことで」その先の就職浪人も覚悟しながら公務員試験を受けたところ、3月に採用に至った。Aさん自体は公務員とい

う職業についてそれほどこだわりがあったわけではなかったが「休みも定期的にあって福利厚生っていうかそういう面もいいからね」と親から言われたことが後押しとなった。

Bさんは高校生の時から考えがぶれず福祉系の就職を希望し、実際に地元の特別養護老人ホームの介護職員となった。就職活動を開始するにあたっての気持ちは「社会に出て本当に働けるのかなと思ってた。それが心配だった。毎日、単純に月曜日から金曜日、仕事だったりしたら、月曜日から金曜日、ちゃんと毎日、行って、やること、できるのかっていう。本当、その時点からも、できるのか、どうなんだろうな。心配になった。」というものであったという。2社の採用試験を受けただけで就活をやめた理由としては「(1社目がダメで2社目で採用が決まったことで)変な安心感が逆に、生まれちゃったんですかね。とりあえず、卒業する後のことは決まったしって、そこで一安心しちゃったっていうのもあったんですよ」という。

介護の資格が取れると勘違いして入学したCさんも4年生になるころには単位もそろい就職活動を始めることになった。3年生の3月に就職活動を開始しようとした矢先に東日本大震災が発生し、母方の実家が津波による被害で被災したため、定期的に復興支援に入ることになる。Cさんは将来は介護の仕事がしたいと思って社会福祉士コースで学んだが、震災と被災地への支援の経験から「公務員試験を受けようっていう方向になった」という。それまで公務員になるという考えは一切持っていなかったが「津波が来て、安定(が大事)だと思い」、方針を変更した。しかし、既に公務員試験を受けるには準備期間が短かったことや、週末ごとに被災地に行っていたため、留年し1年大学に残って、公務員試験を翌年受けるという方針を立てた。この方針のもと、4年生の秋まで就職活動はしなかったが、学内企業説明会に参加した際に、たまたま空いていた飲食店企業のブースに「あ

表12 就職活動について

	就職先と職種	就職活動について
Aさん	地方公務員	社会福祉士コースだったが、就職さきとして福祉系は受けず、ビルメンテナンスやガス会社、電気会社などを受けた。エントリーは100社くらいした。その間に父親から地元なんだから受けてみればというので、現在の職場である市役所を地元の友達と一緒に受けたら採用された。決まったのは震災の年の3月くらいだった。
Bさん	特別養護老人ホーム(介護職員)	最初の実習先でお世話になった地元の施設を受けたが不合格だった(筆記ができなかったのではないかと自分では思っている) それでかなり気持ちがへこんだが、同じく地元で介護福祉士の専門学校に行っていた友達が内定をもらっていた隣の特別養護老人ホームの就職説明会があることを知りそれに参加。そこで内定をもらい働くことになった。
Cさん	飲食店(社員)	3年生の春、そろそろ就活を始めようとしたら東日本大震災が発生した。その後、定期的に祖母が住む岩手に復興支援に行くことになり、家も落ち着かなかった。この経験をきっかけに、就職先は安定を求めるようになり(父親が以前から勧めていた)公務員試験を受ける方向に気持ちが傾いた。しかし、その時点ですでに勉強を始めると遅いので、大学を留年して来年頑張ろうという気持ちでいた。11月になり、就職課から学内企業説明会に来ていた現在の職場のブースに「とりあえず練習で行け」と言われて連れていかれそこで逆指名をもらった。その流れで(本当は嫌だったが)面接に行くことになり、12月に現在の会社から内定を得た。内定が出た後も行きたくなかったが「断りの電話をするのが面倒くさそうだから」そのまま2月になってしまい、結果就職すると返事をした。最終的には「取り合えずこの会社で社会勉強してみようかな」という気持ちになった。
Dさん	特別養護老人ホーム(介護職員)	就活を始めるにあたり、履歴書の資格欄に記入できるという理由で「ヘルパー2級」(現初任者研修)の資格を外部に取りに行った。そこで行った実習先が良く、高齢者系で働くのも悪くないと感じたが、この頃は障害の支援が良いと思って探していた。4年生の6月に就活を開始。障害や高齢者関係の施設を5、6か所受けた。民間企業の介護系も1社受けた。親は地元に戻ってきてほしいといったので地元のハローワークを介して1か所福祉施設を受けて内定をもらった。給与等の条件には一切こだわりはなかったが、見学に行くと現場の雰囲気や職員の対応などから直観的に感じたものを判断条件にした。最終的に、時間をかけて待ってくれた現職場の雰囲気と、もう夏になりこれ以上就活したくないという気持ちから現職場に就職を決めた。
Eさん	特別養護老人ホーム(事務員)	3年生2月に開かれた社会福祉士の実習報告会が終わってから就職活動を始めようと思っていたが、なんだか遅くなり3月に開始した。一般企業と福祉系を両方受けた。福祉系で夜勤があるところは体力的に難しそうなので、現場ではなく事務職で採用試験を受けたが、実際はどの施設もまずは現場からということだった。このため内定をもらった介護系はすべて辞退し、4年生の6月くらいに「採用担当の人と馬が合った」ドラッグストアに就職することを決めた。その後就活はしていなかったが、2月くらいになって、社会福祉士コースの教員から地元の社会福祉法人で事務職募集の話があり、そこに行くことになった。結果的に福祉系に行くことになった背景には、その間に祖父の入院や介護などを経験したことが影響していると自分で思っている。
Fさん	アパレル(販売員)	4年の初めごろに周りが就職活動を始めたので自分も開始した。サービス系が良いなというざっくりした気持ちはあったが、そのほかの給与や福利厚生などはあんまり気にせず、自分にとって面白そうかどうかを気にした。具体的な活動は、学内企業説明会を使って行った。そこでの経験は仕事のイメージを広げてくれた。しばらくして就職課とゼミの先生が相談して就職先となったアパレル企業を勧めてくれた。その会社のことは知らなかったが、自分に合うと先生たちが勧めてくれたので、採用試験を受けた。その会社の人事の人がとても面白い人で、その人に興味を持つ形で就職を決め、就職活動を終了した。4年生の夏くらいだった。

	就職先と職種	就職活動について
Gさん	専門学校へ進学	介護系と病院をちよろっと受けていた。その時にやっていたアルバイトが病院の看護助手だったので、そこで就職するのもありかなと考えていたが、3年生の12月ごろに親から（その就職の仕方は）「もったいない気がする」といわれたので、卒業後就職をせず、もう一度専門学校に通い（受験資格は持っていたが）診療情報管理士の勉強をし直すことにする。
Hさん	車販売店（販売員）	3年生の春休みごろから就職活動意識し始め、1日インターンシップや合同説明会などに何度か参加した。しかし実際に自分がどう働くとかどこで働くとかは全然びんと来なかったが、電車で酔うので車で通えるところが良いと思った。学内企業説明会に来ていたところで話を聞き、よさそうなどころを受けた。自動車関係とスポーツ関係などを受けた。給料が良いということも大事にした。その理由としては早くいい車変えていい家が持てるから。最終的には母親が乗っていた車の販売店で、その車であれば通勤OKと言われたのでそこに決めた。母親の車を買っていったときに自分もついていった経験があったのも、決め手となった。5月に内定をもらい終了。以後は活動はしなかった。
Iさん	特別養護老人ホーム（介護職員）	3年生の時に親の勧めで就活塾を受けた。（実家は地元で自営業を営んでいるが）親からは自分の行きたいところに行けば良いという方針だった（大学受験の時と同じ）。スポーツ関係の仕事に就きたいという気持ちから本学を選んだが、結局就職活動ではその関係の会社は1社も受けず、ディスカウントストア1社とあとは介護系を受けた。その理由としては、いろんな人とコミュニケーションが取れるのはこっちの分野だろうと思ったのと、2年生の時に初任者研修の資格を取ったことがあり、自然にそうになっていた。介護系をいくつか受けたうち、受かったのが現在の職場だった。8月後半くらいに内定をもらい就活を終了した。

表13 就職先で重視したこと

	就職先を決めるときに特に重視したこと
Aさん	休みが定期的であり福利厚生が良いところ（と親に言われた）
Bさん	実家から通うことができる（お金をためたかった）
Cさん	流れのままに…
Dさん	特になし。施設見学に行き直観的に感じるごとと、ノリとテンションで決めた
Eさん	体力的にむつかしいと思ったので夜勤がないこと
Fさん	自分にとって面白そうか、面白そうでないか
Gさん	病院の雰囲気と規模（中くらいが良い）
Hさん	車で通勤できて（電車で酔うので）給与が良いところ
Iさん	特になし

そこチャンス、行け」と就職課から言われ、仕方なく説明を聞きに行ったところ逆指名をもらう。今度は「「逆指名もらったから、面接行け」って言われて」という外部からの力と流れの中で内定をもらうことになったという。もともとCさんは飲食店でアルバイトをしていたため「絶対飲食店で働きたくなかった」のだが、その後も内定辞退の電話を入れるのを面倒に思

ったり、先方から「ちょっと（辞退をするのは）待ってください」と言われ続けることとすると2月まで辞退の連絡を持ち越した結果、「とりあえず社会勉強してみようかな」という気持ちになりその飲食店に就職を決めることになる。

Dさんも社会福祉士コース生だったが、就職活動を始める前は「福祉はやだ、まして福祉

一本で絞るのはやだ」と考えていた。一方、就職活動そのものについては「キャリア開発とかで説明会にはこういうスーツを着てとかメイクはこうでとかっていうふうにいわれて、やっぱり就活楽しそうだな」と前向きに捉えていた。就職活動を前に履歴書に書ける資格が欲しいという理由からヘルパー2級研修(現「介護職員初任者研修」)を外部で受講したところ、思っていた以上に高齢者介護の現場の印象が良く、その経験が結果として福祉系への就職を現実的に考えるきっかけとなる。4年生の6月になってから「本腰を入れて」就職活動を始め、障害者領域を中心に見学や採用試験を受け、数か所から内定を得る。この頃になると一般企業に就職するという気持ちが薄らぎ、「もう福祉は福祉でいいや」「資格があるから生かせるのはそっちしかないと思って」福祉一本に絞った就活をすることを決めたという。自分が働く職場は「ノリとテンションと勢いだけで」決めたというが、実際には親が勧める地元の施設も含めて複数の施設に見学に行き、最終的にケアに対する考え方に共感した都内の特別養護老人ホームの介護職に就職を決めることになる。

Eさんも社会福祉士コース生であるが、就職活動を始めるにあたって体力的に夜勤がある仕事は難しいと判断し、「一人暮らしをしたいと思うと、やっぱり福祉系だと、夜勤がないと(給与的に)厳しい」と考え、福祉系の事務採用と並行して「一般(企業)のほうも見てみようかなと思って」何社かの企業の採用試験を受けた。福祉系採用については、3社からすべてから内定を得るが、いずれも事務採用と謳いながら実際には介護職での採用であったことや、入社意思決定を1週間以内に決めてほしいと「グイグイ来る系の施設」であったため、いずれも内定を辞退した。一方で、一般企業の方で内定を得ていたドラッグストアの採用担当者と馬が合い、話しをしていて「なんか楽しそうだから、いいやここにしてみよう」と考え6

月に意思表示をし、以降は活動を行わなかった。しかし、年が明けてから学科の教員から地元の社会福祉法人での事務職(総務課兼ボランティアコーディネーター)募集の話を受け、試験を受け採用に至る。ドラッグストアはその時点で内定辞退をしている。この時期に祖父の介護を経験したことも結果として「福祉系」を選んだきっかけになったという。

Fさんは大学選びの段階から「サービス業に就きたい」と考え、就職活動の時期までその考えを一貫して持っていた。就職活動に際して「興味があることは何だろうな」と自問した。「正直、給料とか会社の福利厚生とか、そういうのあんま気にしてなかった」という。Fさんが職場を選ぶ際に一番大事にしたことは「面白そうか、面白そうでないか」ということだった。大学での学内企業説明会を活用した就職活動するなかで「いろいろとしゃべって、そこで結構イメージが広がった。質問とかしてて、こういうのがやりたいとかこういうのは嫌だとか。そういうのが判断基準みたいなのがあれで少しかできたとは思う」と振り返っている。その後、ゼミの教員よりアパレル系企業を紹介される。その会社については「知らなかったの。知らなくて調べて、大手なんだよとか言ってたから、へーみたいな。ブランドも私、Nしか知らなくて、Nも別にそんな好きじゃなかったんだけど。私に合うよみたいなこと言ってたから、そうなのかなみたいな感じ。じゃあ、やってみようみたいな」感じで試験を受け内定を得る。その会社に決めた理由は「仕事内容はそんなに興味なかったけど、人事の人がすごい面白い人がいて。ご意見番みたいなおばさんがいた」ことが決め手となったという。4年生の夏に就職活動を終了している。

診療情報管理士の資格取得を目指しながらもいったん受験勉強から離れていたGさんは、介護系と病院の採用試験を何社か受けた。4年生の秋に病院で看護助手のアルバイトを始めた

ことをきっかけに「このままバイト先で就職するのもありかな」と考えが変わった。しかし、年末ごろに親から「もったいない気がする」「せっかくここまで勉強して、ちゃんと管理士の勉強もしていたんだったらもうちょっとくらい、勉強とか頑張ってみたらどう？」と提案され、最終的には就職ではなく、もう一度診療情報管理士の勉強をするために専門学校への進学（1年間の編入枠）を選択した。既に受験資格を有しているにも関わらず専門学校に行く理由としては「勉強を怠っていたが、やれるチャンスをもう一度与えてくれたから、もう一回くらいやってみてもいいかな」と思ったという。

サークル活動とアルバイトを中心とした学生生活を送ってきたHさんは、3年生の後期から学内企業説明会やインターンシップに、「みんなが行ってたんで、自分もちょっとやっとうかなって」思ったことや、「インターンシップに行くとかオカードがもらえる」ことなども動機となり、就職活動を意識するようになった。Hさんが仕事を選ぶ際に最も重視したことは志望校選びと同様に「車で通えること」であり、業種業界はこだわらなかったという。活動の進め方としては「大学の学内企業説明会でひとまず話を聞いて、よさそうだなってところを受けようかなって思って。それで自動車関係と、スポーツ系も。スポーツ系は、あんま来てなかったんでリクナビとかマイナビでちょっと調べて」という方法で行った。またHさんが車通勤以外に大事にしたことは給料が良いことと休みがシフトではなく固定していることであり、その理由としては「お金稼いだほうが、早くいい車買えて、いい家も持てるから」「シフトだとサークル活動に行きづらい」というものであった。最終的に車販売店の営業職に就職を決めるがその決め手は、母親がその会社の車を持っていたので通勤車を買わなくて済む、というものであった。5月に内定をもらい「4年生残り遊びたいなって思い」その時点で活動を終

了した。

Iさんは3年生の時に親に勧められて就活塾を受講している。Iさんの実家は自営業であるが特に親から就職について希望を述べられたことはなく、自分の行きたいところに行けば良いという感じだったという。就活塾で学んだことは「面接の大事さ」であり「自分を出さなきゃいけないので。言葉にするのは結構苦手な部分があるので、国語の力だったり、そういうのを付けなきゃいけないんだなと思った」。入学時にはスポーツ関係の仕事に関心があったが、スポーツ関係の企業は1社も受けなかった。その理由としては「スポーツは好きなんですけど、仕事でするよりかやるほうが好きなので。別に仕事としてはいいかなと思った部分もあったんですけど。そしたらいろんな人とコミュニケーションとれるのはこっち（介護）の業界だったので。自然とどんどん介護業界に。初任者研修の資格を取ったっていうのも大きい」というものであった。8月の後半に内定を得て、そのまま他は受けずに終了している。初任者研修を取得したとはいえ、大学で専門に学んでこなかった福祉業界に対する心配はなかったかという質問に対しては「他の業界に比べてお給料が見た感じ少ないので。そのうち人生、結婚とかあるので、その辺は大丈夫かなっていう心配が今でもあるんですけど。それぐらいですかね、やっていく自信とかっていうのはあったので」とのことで、就職活動の際に介護の仕事が自分のなかでしっかりと重なったという。

5、考察

本稿では健康福祉マネジメント学科卒業生9名を対象に行ったインタビュー調査のうち、志望校選びから4年次の就職先の決定に至るまでの前半部分について、質問項目ごとにその口述内容をまとめた。

以下、9名の卒業生のインタビューから健康

福祉マネジメント学科の現状と課題について5つの観点から考察する。

1) 本学への志望動機から見た現状と課題

本学への志望動機は複合的であったが、最も多く共通していたのは自身の学力に見合っていたから、というものであった。学力に応じて大学を選ぶこと自体は問題ないが、「ここしかなかった」や「勉強したくないからここを選んだ」といった消極的な動機で入学した学生が、入学後にやりたいことを見つけたり、後付けであっても「大学でこういうことがしたかった」と動機づけることができる仕掛けやきっかけの機会を学科として作っていくことが必要と言える。またDさんのようにプライダル志望で入ってきた学生の中には、健康福祉マネジメント学科があること自体を1年生の後期まで知らなかったという人も少なからずいると思われるため、入学後の早い段階から再度、学部学科コースの説明を丁寧に行い、あらためて健康福祉領域に関心を持ってもらう機会を作ると良いのではないだろうか。

また、最初から健康福祉領域に関心があって本学を志望した人は9名中6名であったが、いずれも入学前にカリキュラム等の詳細は理解されておらず、大学パンフレットやホームページ等に掲載されているキーワード（「福祉」「経営」「アルディージャ」「西武ライオンズ」など）から想像された自身のイメージで判断しようとする傾向がみられた。特に「福祉」は「=介護」と狭くイメージされがちであるため、高校生にはもちろん、高校の教員に対する説明の工夫や広報手段を検討すると同時に、一律の科目と内容で行われている社会福祉士養成校における本学の特徴をもっと打ち出していくことが必要と言える。

その他の志望動機としては、交通や立地など物理的条件が挙げられていた。特に、関東近県出身の高校生にとって本学の立地は、実家から遠く離れすぎず、ほど良く都会に近く、ほどよ

くのどかであるという点で上京への足掛かりとして適当であることがインタビューからも明らかになった。そうしたアクセス面や環境の「ほどよさ」についてもっとPRしていくことも有効なのではないだろうか。

2) 一年次の履修における現状と課題

健康福祉マネジメント学科の専門科目は一年次にはほとんど開講されないため、これらの学びへの期待が高い人ほど早い段階で不満が生じるのではないかと予想した。しかし実際には、そうした不満を持った人は今回の対象者の中にはおらず、むしろ必修科目としてサービス経営系科目に触れることを新たな学びの機会として前向きに捉えた意見がみられた。一方で「必修だから仕方ない」という理由だけでサービス経営系科目を捉えてしまうと、Eさんのように早々に苦手意識を持ってしまうこともあるため、特に健康福祉領域に関心があって入学した学生にもそれらの科目を一年次で学ぶ意味や意義が伝わるような導入を工夫することも必要なのではないだろうか。

3) 学科コース選択時における現状と課題

現在、本学の学科選択は1年生の後期に説明と登録が行われているが、ほとんどの学生が入試の段階でいったんどちらかの学科を希望した状態で入学している。

インタビューでも明らかになった通り、もともと健康福祉マネジメント学科を希望した学生は特に迷うことなく学科選択を行う傾向にあるが、サービス経営学科を希望して入学した場合には、なにかきっかけがない限り特にやりたいことが見つかっていなくても学科を変更することはほとんどないのが現状と言える。

最終的にどちらの学科を選ぶとしても、各自が積極的な意味で選択できるよう、健康福祉マネジメント学科の存在や情報を現在よりも早い段階から知ってもらう機会をつくる必要がある。

また、本インタビューの対象となった5名の社会福祉士コース生は（国家資格の取得を目指すコース）いずれも社会福祉に関心があるという理由からコース所属をしているが、実際にはこれ以外に、単位不足の解消や大学に来る習慣をつけることを目的としてコースに所属するケースがある。本来であれば前者が望ましいと言えるが、後者の目的でコース所属し、最終的に福祉系の学びに関心を持ち、そのまま福祉領域に就職をするケースも散見される。従って、コース選択に際しては、専門領域への関心がある学生だけでなく、多様な目的を持った学生を広く受け入れたうえで、動機付けを後から支援するというやり方を今後も工夫しながら継続していくことが求められる。

4) 学科での学びについての現状と課題

学科での学びで印象に残っていることについて、9名中7名が資格取得の過程における経験を語ったことは、資格の取得と連動した科目を多く配置した本学科の特徴が出た結果と考えられる。実際に合格するかどうかはもちろん重要なことであるが、インタビューを通して、資格取得の過程における体系的な勉強や実習等の経験が彼らを大きく成長させていることが推察された。

健康福祉マネジメント学科では学生一人一人の資格取得を推奨し、小規模であることのメリ

ットを活かしその過程を丁寧に支援する環境を有していることをより明確に打ち出す方向性も考えられるのではないかと。

5) 就職活動における現状と課題

9名中5名が初職で健康福祉領域での就職をしていたことや、彼ら以外にも福祉系領域に就職する学科卒業生が多いことは、学科として一定の成果をあげている結果と言える。

一方で、3年間にわたって「福祉」を学んできた学科の学生が就職の段階になっても、福祉の就職を介護職に就くことと狭義に捉えがちな傾向にあることは学科における教育の課題のひとつといえる。実際の「福祉」の求人が高齢者介護の現場に多く偏っているという現状はあるものの、もっと少し広い視点で「福祉」をとらえ、多様な業種職種に就きながら、学科で学んだことを活かせる人材を育成するというイメージを教員も持つ必要があるのではないかと。

本研究は2016年度本学共同研究補助金「健康福祉マネジメント学科卒業生のキャリア形成に関する研究—学科卒業生の追跡調査の実施から—（研究代表：加藤三彦）」により行われた。

インタビューにご協力いただいた9名の卒業生と関係者の皆様に感謝いたします。